

五月雨宮

the Rainy Palace

草谷 十織

Kusatani Tori

アパートの近くを流れる用水の、水音がかすかに聞こえる。ほかに聞こえる音といえば冷蔵庫の稼働音と、たまに金魚が水面上で呼吸をする音くらいで、あとは時を止められてしまったかのように静かだ。人々に置き去りにされた住宅街。空が曇ってきたのか、それとも日が傾いてきたのか、閉ざしたカーテンからこぼれる光は徐々にか細り窓枠の外へとかえっていく。その繊細な変化に布団にくるまる僕の意識はぴんと張りめぐらされ、気だるい眠りの中でかろうじて保たれている。その隙をついて、やがて騒がしい夜が部屋の隅という隅から忍び寄ってくるのだ。

僕は今朝からずっと眠り続けた疲れと、鈍い頭の痛みを引きずってベッドから起き出した。カーテンを開くと、空には暗い青灰色の雲が垂れこめている。シャワーを浴び、ドレスを着て、化粧をし――仕事の支度は滞りなく進む。金魚にも、忘れずに餌をやった。今日も、すべてが順調。すべてが完璧。ばいばい、行ってきます、と部屋に別れを告げ、舞い戻ってくる住宅街の明るい影から逃れるようにしてアパートを去った。

ビル街の雑踏にまぎれこむと、そこはすでに帰路を急ぐ人々の病みきった足音でいっぱいだった。今にもこぼれ落ちてきそうな空模様に、地下構内へなだれ込む人々の足はさらにはやまる。まるで、幾岐にも分かれる大河の流れのようだわ。じんと麻痺した身体の芯を抱え込みながら僕は思う。それなら、地下鉄の中はよどみ滞った排水？ 自分を押し運んでくれる流れが生まれるのを、じっと耐えながら待っているような。いずれにしても……ああ！ 誰も他人には目もくれず、視線を交わそうとさえしちゃくれないんだ。こんな観賞してくださいと言わんばかりの恰好をしているのに。きれいなものも汚いものもみんな見えないふりするのが、うまく流れに乗る方法だって思ってるんだね。ああ嫌い！

でもね、今日はそんなにおいしい君たちのことも許してあげる。運よく僕は機嫌がいいのだ。あの人が僕に会いに来てくれる日だから。僕は降車するまぎわに、まだ車内に押し込められている彼らをちらりと見て微笑んだ。それじゃあ、みなさんはせいぜいがんばって。せっかちなドアが一瞬で閉まり、地下鉄が走り去っていくのを目の端でそっと見送る。

そして僕は、夜の街へと身をひるがえす。

黒いスーツに雨の気配を漂わせて、彼は一面の大理石が白い輝きを放つエントランスに佇んでいた。

「品のない格好ですまないね」彼は困ったように笑って、水滴をまとった睫毛をしばたたかせた。「車から出ようとした途端に、このありさまだよ」

「動かないで」

僕はたしなめるように彼の頬に手をやり、右手に持ったハンカチですくい取るようにして顔と髪的水分をきれいにふき取った。それから、肩のあたりが少し濡れている上着をそっと脱がせ、「これ、きれいにしておいてね」と言ってボーイに手渡す。

「やっぱり。ひどかったのね」

「うん？」

「雨だよ。ねらったみたいに降り出してきたでしょう？ 僕って雨女だから、何かすごく悪いことしてる気分」

そう言って彼の手を引き、自分の持ち場所である、下に毛皮のカーペットを敷いた緑のベロアのソファへと導いた。

「でも、今日も懲りずに来てくれてうれしい」

「ここに来なくちゃ、週末まで必死に働いた気がしなくてね……ああ、ありがとう」

座ると同時に煙草をくわえ出す彼に、僕はすかさず燐寸を擦って火を差し出した。彼と僕が顔を寄せる小さな空間にかすかに光が灯る。僕は会うたびに交わされるふたりだけの秘密のような、この瞬間がとても好きだった。彼がふうとつく煙の吐息にまかれるのも、好き。

「お父さま、元気にしてる？」

僕はわざとらしく首をかしげて尋ねる。

「ああ」

彼はそう頷いて微笑んだだけで、それ以上言及することはしなかった。僕が自分から口にしたとはいえ、あまり「お父さま」の話の聞いたがらないということをちゃんと知っているからだ。

そう、ここに来る客たちはみな、精神的な駆け引きによって女たちを愛でるということに長けていた。あくまでここは、おおよそ考えうる最高のもてなしによって男たちの権威に箔をつけるための場所。それを知っているからこそ、パパも監視役をつけるだけにとどめて、僕がこの店に勤めることを許してくれたのだろう。

「さつきくん」

ふいに彼が僕を呼ぶ。

「なあに？」

「テーブルの上をごらん」

言われるままに彼が指した黒檀のテーブルの上を見ると、金色の蝶の文様が刻まれた細い箱が置かれていた。

「まあ、いつの間に」魔法を見せられた子どものように驚いてみせてから、そっとその箱を手にする。

「開けてみてもいい？」

「どうぞ」

彼の微笑みに胸を躍らせながら上質な紙の蓋を優しく持ち上げると、中には縮緬の巾着袋が入っていた。僕はさらにその中身を取り出す。それは、巾着と同じ赤い花柄の布が巻き付けられた瀟洒なつくりの万華鏡だった。

「すてき」思わず声が弾む。「この前僕がほしいって言ったの、覚えていてくれたのね」

「ああ。さつきくんの気に入るかどうかはわからないけど……。覗いてみてごらん」

僕は頷いて、万華鏡を天井のシャンデリアの光にかざすようにして右目にあてた。すると途端に、うつくしい鏡像が僕の視界を埋め尽くす。そのまま筒を回すと、三原色を基調としたガ

ラス片がその凶形に複雑な変化を与えた。

静かな安らぎがからだを満たす。僕は恍惚にひたされながら、まるで水底に揺れる光を見ているようだ、とぼんやり思った。

□

少女はプールの中に浮かびながら、水底に揺れる光を見ていた。当時から内面に籠りがちだった少女は、年相応に他の子どもと戯れるよりもひとりでぼんやりとしているのが好きだったのだ。得意な蹴伸びを駆使して深く潜ったり浅いところを滑らかに移動したりと、水の感触を全身で楽しむ。

しかし、その平穏を破って、少女が顔を出すたびに水を浴びせては悪戯をするものがあった。「おにいちゃん」

やめて、と少女が異を唱える前に、また次の水が顔をめがけて矢継ぎ早に襲いかかってくる。それは、少女に息継ぎすら許さないかのようなあからさまな攻撃だった。少女が広いプールを縦横無尽に逃げ回っても、執拗に続けられた。そして何よりもおそろしかったのが、にやにやと笑っているその相手が普段同じ家で暮らしている「兄」だということだった。周囲の人間に助けを求めることもできないまま、少女はどうとう相手に手首を捕えられた。振りほどこうともがく水音の中で微かに「死ぬかもしれない」という声が聞こえる。息が苦しくて意識に霞がかかっている中、兄の手は少女の長い髪を乱暴に引っ張り、水着の胸元につかみかかる――

もう、その後の記憶は定かではなかった。午後の晴天が急速にかき曇り、少し離れたひとの顔すら全く見えないほどの俄雨が降り出していたことは、決死の思いで抵抗していた少女には知る由もなかった。

気がつくと、少女はプールサイドに横たわっていた。先ほどのことが嘘のように手足が冷えきっている。顔を照らす温かい光を感じてやっと重い瞼を開こうとしたころ、どこからともなく聞こえてくる耳を引き裂くような誰かの悲鳴に、少女は身を震わせて飛び起きた。

最初は、何が起きているのかわからなかった。空は青く水面も穏やかで、何の変哲もない夏の風景にみえた。しかし、徐々に集まっていくひとびとの視線の先にあるものを見て、少女は戸惑いながらも少しずつ状況を飲み込んでいった。

そこにはひとのからだ浮かんでいた。それは水の動きに合わせて微かに揺れるだけでぴくりとも動かず、肢体の白さは家で飼っている金魚の腹を思わせた。少女はその光景に釘づけになった。きれい、という言葉が、真っ先に少女の頭に浮かんだ。

水中をゆらゆらと漂う光耀ばかりが、少女を惑わせていた。そして、その屍体が自分の兄であることに気づいたのは、ずいぶんと後のことだった。

□

音はない。けれど、確かに雨の匂いがする。僕は身をよじり、腕を精一杯伸ばしてカーテンを開けると、窓の外は霧雨にけぶっていた。

瞬きを繰り返して眠気を払うと、僕はゆっくりとからだをベッドから起こした。休日とはいえ、いつもの習慣で夕方、しかも雨の降る夕方に目覚めるとなると決して気分のいいものではない。そんな時はやはり、シャワーを浴びてすっきりと夢の残滓を洗い流すに限る。このアパートは築三十年ほどの古いものではあるが近年改装が施されており、特にタイルが敷き詰められた広い浴室は僕のお気に入りだった。思わず足取りが軽くなる。

しかし、そこで僕は部屋を包む異常にはたと目を留めた。キッチンの横に置いてあるテーブルの上の丸い金魚鉢。その中でゆらゆらと泳いでいるはずの、生きものの気配がぴたりと絶えている。

「嘘」

胸を潰されたかのような声が自分の口から漏れる。思わず足を震わせながらおそるおそる近寄り、白い腹を見せて水面に浮かんでいる金魚の姿を確認すると、僕はそのまま崩れるようにして座り込んだ。

頭を抱えて、雨のように絶え間なく大粒の涙を落とす。とても直視などできなかつた。昔から何度も飼っていた金魚の死に直面したことはあったけれど、この子はその中でも特別だった。初めてひとり暮らしをする僕に、実家からついてきてずっといっしょにいてくれた言わば同居人のようなものだったのだ。僕は大声でむせび泣き、内側から溢れ出てくるような激情にしばし身を任せた。

すっかり日も暮れて部屋が暗くなるころになってようやく涙がおさまってくると、僕は意を決するようにして立ち上がった。そのまま浴室へと向かい、いつものようにシャワーを浴びる。そして、シルクのドレスばかりのクローゼットから黒いものを選んで身をおさめると、普段より少し薄い化粧をして、外へと出る。アパートの庭には、見事な紅色の芍薬が咲いていた。僕はその花をひとつ手折り、部屋へと戻って再び金魚鉢の前に立つ。そして、ひとつ息をついてから金魚の屍体をそっと手ですくい上げると、芍薬の花弁で優しく包み込んだ。

僕はそのままアパートの庭に戻ると、芍薬の根元に金魚を埋葬した。雨に濡れることも厭わずに、素手で必死に穴を掘っている間は冷静でいられたが、艶やかに水滴を纏う花弁のベッドの中の金魚に土をかぶせていき、すっかり見えなくなってしまうころにはまた悲しみが込み上げてきて、今度は雨と区別のつかない静けさでさめざめと泣いた。

「すみません」

突然、背後から声がして、僕は我に返って振り返る。そこには、いつのまにか若い男が傘をさして立っていた。彼以外に人気はなく、どうやらその呼びかけは僕に向けられたものらしい。

「はい？」

僕はあわてて腕で顔の涙を拭いながら、そう言って首を傾げる。

「あ、いえ、その……このアパートにお住まいの方ですか」

男はなぜか、僕の顔を見た途端に露骨に面倒そうな表情になって、そう尋ねた。何よ、話し

かけてきたのはそっちじゃない。思わずそんな心の声が漏れるが、何とか取り繕って微笑みを返す。

「そうですが、何かご用でも？」

「き、気分でも悪くされたのかと思ひまして。その、雨の中でうずくまっていたものから」

男は態度を改めるどころか、僕の視線から逃れるように目をそらす。ああ、気に入らない。気に入らない！ 僕が不審な行動をしていたことは認めるけれど、それを差し引いても初対面の人間に対してこの仕打ちとは、いかがなものかしら？

「わたしはいたって健康ですので、どうかお気になさらず。そう言うあなたも、ここの住人でいらっしゃるの？」

今度は不快感を包み隠さずにそう言い放つと、男はいますぐにでも立ち去りたげにすばやく頷いた。だが、僕はそのままだで彼を帰す気は少しもなかった。会話を途切れさせる隙を与えず、さらに質問をたたみかける。

「そういうことでしたら、甘えさせていただきますね。わたし、体調に異常はありませんが、死んだ金魚を埋めている時に爪がぱっくり割れてしまったんです。よろしければ、消毒液と包帯をお恵みいただけませんかしら」

「わかりました」男は頑なに目をそらしながら答えた。「いますぐに取ってきますから、少しお待ちいただけますか」

「この雨の中で？」

僕はしっとりと濡れたドレスの裾を持ち上げてみせた。

「それこそ風邪ひいちゃうわ。お部屋にはお邪魔させていただけないのかしら」

「ご自分の部屋でお待ちになればいいでしょう」

男はきっぱりと言った。まあ、生意気なこと。目の前の女が、危険を冒してまでまだ名前も知らない男の部屋に入ろうなんて魅力的な提案をしているのに。僕はそんな呪詛にも近い思いを視線に込めながら、許してくれない限り二度とここを動かないとばかりに彼を威圧した。

ふう、と男が張りつめていた息を小さく吐く。一瞬、彼が白い煙を吐いたかのように見えたが、すぐ雨に紛れたので判別はつかなかった。

「すぐに帰っていただけるのでしたら」その声は、心なしか震えていた。「いいですか。消毒液と包帯をお渡ししたら、すみやかに自分のお部屋にお帰りいただきます」

男の姿は、僕におびえているようにも見えた。相変わらず反抗的な姿勢は目につくが、一応譲歩はしてもらえたようなので、僕は表情を緩めて「ありがとう」と答えた。

男の部屋は一階の左端、僕の部屋の真下にあたる場所だった。僕は中まで上がっていきこうとしたが、玄関に入ったところで彼に止められた。全身がずぶ濡れの上に泥だらけの手とあっては異を唱えても説得力はないので、そこは大人しく従うことにした。

「このアパートは若いひとばかりだって大家さんから聞いていたのだけど、あなたは？ 学生さんかしら」

「まあ、そんなところ」

彼は素っ気なく答えて、早足で部屋の奥へと歩いていった。僕はその間、しげしげと部屋の様子を眺める。僕の部屋と同じ間取りのせい、煙草の匂いが充満している以外はあまり個性を感じられない内装だった。唯一気になったのは、彼の部屋にも金魚鉢があり、しかもそれひとつだけではなく同じように小ぶりの金魚が数匹入った鉢が部屋の中にいくつも置かれていることだった。

「奇遇ね。あなたも金魚を飼っていたなんて」

僕は、消毒液と包帯を抱えて戻ってきた彼に言った。すると、彼がその口に煙草をくわえていたので、反射的に手が伸びる。

「火、つけてあげましょうか」

彼は黒く汚れた僕の手をなんなくかわし、隙のない動作で自分のライターを取り出して火をつけ、ゆっくりと紫煙を吐いた。

「すぐに帰るといったでしょう」

そう言って彼は、放り出すようにして消毒液と包帯を靴箱の上に置く。

「僕、その道のプロなんだよ」僕は顔を彼の近くに寄せた。「何ならこの手も洗ってくるから、もう一本どう？」

「話が違う！」

彼は激昂して、僕のからだを突き放す。

「もう用は済んだはずだろう。いい加減に……」

その時だった。罵倒の言葉を吐こうとした彼の口から大きな白い煙がひとかたまり、わき上がった。それはすぐに紫煙と混ざり合ったが、その異質でありながら甘美でくらくらするような香りは、明らかに煙草のそれとは一線を画していた。

「いまの何？」

僕は自分でも驚くほど抑揚のない声でそう尋ねた。

「何って、煙草の煙に決まってるだろう」

「嘘。僕は煙草の匂いには慣れてるもの。いまの煙は絶対に煙草のものとは違う。何？ いったい何なの？」

うろたえながらも、自分を落ち着かせるように手に持った煙草に黙って吸いつく彼の額に、汗が光る。何か隠してる。絶対に。僕は、その確信を得ていくほどに胸が高鳴り、笑みがこぼれるのを止められなくなった。

悦びに震える声を必死に抑えながら、僕は言った。

「……それ、他人にばれちゃいけないもの？」

□

濃い霧が立ちこめる公園の茂みの中で、ふたりの男女が抱き合っている。女の方が、初めて見た男の表情に戸惑いながら身じろぎをする中、男が食らいつくように舌を絡ませる様子は飢

えた獣という形容が相応しかった。

ふたりが交わす唇の間からは、時おり白い煙が漏れ出していた。男が吐き出すそれは、口移しによって女の口腔へ、そして体の奥深くへと忍び込み、馥郁たる香りによってさらに女を魅了する。女の方は男の求めに応えることに必死でその煙の効用に気づくことはなかったが、無意識の内に見せる恍惚とした表情は、男の興奮を加速させるには十分だった。

男が一旦口を放し、女が着ているワンピースの裾に手をかける。すると、女は身を震わせてその手を軽く掴み、ぜいぜいと喘ぎながら首を横に振って彼を制止した。

「……だめ？」

男は女の顔色をうかがいながらおずおずと尋ねる。

「ごめんなさい、ちがうの。何だか、苦しくて」

「ちゃんと鼻で息してた？」

「してたわ。蓮(はす)くんっていい匂いがするし、その……すごく気持ちいいんだけど、胸が苦しくなって、くらくらするの。わたしの体調が悪いのかな」

「ごめん、気づかなくて」

「いいの。すごく、嬉しかったよ、蓮くん。でも、ちょっとだけ休ませてくれないかしら」

肩で息をする女は、頬が上気しているとはいえとても健康的なものとは言い難そうだ。男はとてつもない罪悪感に駆られ、勢いに任せて唐突に彼女を誘い込んだ自分を恥じた。

「わかった。それじゃさっきのベンチに戻ろう」

そう言って優しく女の手を引き、先ほどふたりで談笑していたベンチへと連れて行って彼女に座って休むように言った。

「飲みものを買ってくるよ。何がいい？」

「ありがとう。そうね、紅茶をお願い」

「了解」

男は頷いて、少し離れたところにある自動販売機へと歩いていく。そして彼女の姿が霧に隠れて見えなくなったところで、大きなため息をついた。同時に、体内に押し込めていた煙が堰を切って舞い上がる。やはり、これが原因なのだろうか、と男は思う。女を惹きつける何かがあるらしいとは前々から感じていたが、それ以上の問題があるとは全く予想がつかなかった。前の女を抱こうとした時は特に苦しむ様子はなかったが、互いの若さを理由に踏みとどまったその後、彼女が何も言わないまま二度と男の前に顔を見せなくなったことを考えると、もしかすると知らぬ間にこの煙が彼女にも害を及ぼしていたのかもしれない。

男は紅茶と珈琲を買うと、深呼吸をして己の昂りがおさまるのを待った。いずれにせよ、この体質を治す方法が見つからない以上、いまは様子を見続けるしかない。からだ中の煙をすっかり吐き出してしまうと、男はふたつの缶を手には彼女が待つベンチへと戻った。霧はなかなか晴れず、その異空間へと飲み込まれてしまいそうな白い視界の中を少し不安になりながら進むと、やっと彼女の姿が見えた。呼びとめようと紅茶の缶を持った方の手を高く上げる。――しかしその次の瞬間、男は目を疑う光景に、出かけた声を永遠に失った。

彼女の輪郭が霧の中で揺らいだと思うと、煙を上げて消えてしまったのだ。

中身を失った服がぱさりと地面に落ちる。それは残像として、男の目に強く焼きついた。両手の缶を取り落とし、脇目もふらずに駆け寄る。そこにはまだ彼女の体温を残した服が散らばっていた。そうだ、あれは確かに彼女だった。彼女のからだは、間違いなくここにあった。それなのに――

彼女に触れようとした手が虚しく宙を切ったその時、男は確信した。他でもない俺が、この手で殺したのだと。愛そうとしたひとりの……いや、ふたりの罪のない女を。

□

「……ふうん。それで、もう女のひととつき合うのは止めたの？」

僕は万華鏡を覗きながら、背後のドアの向こうにいる彼に淡々と尋ねた。

「つき合うどころか、ここ数年はひと言も会話を交わしてない」

「へえ」

気のないような返事をして、手の中で筒をころりと一回、転がす。雨の音と換気扇が回る音、それに微かに聞こえてくる彼の荒い息づかいを効果音にして、無限に増殖する鮮やかな色彩の鏡像が収縮を繰り返す。

「なるほどね。そんな状況で、わざわざ僕に話しかけてくれた、ってわけ」

僕はくすりと笑って振り返る。磨りガラスが張られたドアは、中の浴室に充満する煙で半透明からほとんど真っ白に塗り潰されている。

「違う。それは」吐息混じりの声で彼はうろたえた。「暗くてよくわからなかったんだ。ひとが、うずくまっているだけとしか。だからとっさに……」

「嘘。あんなに背中が開いてるドレス着てたんだから、いくら黒い服でも女だって気づかないわけない。我慢しきれずに声かけちゃったんでしょ？」

「違うって言ってるだろう」

「説得力ないよ。何だったらいますぐ僕が中に入って、証明してあげようか。蓮くん？」

言葉が途切れる。

「……止めてくれ。それだけは」

「でしょう？ もう少しお話ししていきましょうよ。僕ももうちょっと万華鏡で遊んでいたいもの。せっかくの夜なんだから。ねえ？」

僕はそう言って唇を指でなぞると、命よりも大事な万華鏡にそっと、口づけをした。

□

あのひとがやって来る。黒い服を着て。坂の上にある寺の長い階段を上って、ゆっくりと現れる。

しかし、僕の心はちっとも弾まない。今日の彼は彼であって、彼でないからだ。シャンデリアも、ベロアのソファも、シルクのドレスでさえ、ここにはない。

「雨宮社長、姉さん、それにさつきさん、こんにちは」

彼は寺の中に上がって真っ先にわたしたち親子のところへ歩いてくると、無駄のない所作で膝を折り丁寧にそう挨拶した。

「こんな暑い日に足を運んでくれて、感謝するわ」

そう穏やかに言って返したのは、母さまだ。彼は心なしか緊張を解いて、微かに笑う。

「ええ、梅雨の中休みの、すばらしい晴天です」

「晴れ男のあの子らしいわね」

「そうだな。夏の日差しがよく似合う子だった」

「いまでもお姿が浮かび上がります。もう十三年も経つなんて、信じられませんね」

――彼が母さま、それにパパと話しているのを、僕は夢の中にいるような思いで眺めていた。一分の隙もない平穏な光景のはずなのに、いびつさを感じるのはこの暑さのせいだろうか。石畳の上で揺れる陽炎が、僕から思考を奪い去っていく。

「さつきさん」

ふと我に返ると、彼がこちらを向いて呼びかけていた。しかし僕は目のやり場に困り、少しくつむいて「はい」と答えるしかなかった。彼はきちんと立場をわきまえているのだから、僕がいつもの調子で振る舞ったところで大したことではないのは知っている。けれど、周囲の少なからぬ視線にさらされているというだけで、どうしても戸惑いを隠すことができないのだった。

「今日は、どうかよろしくお願いしますね」

そうだ、いま僕はパパの隣にいるのだ。堂々とできないはずはない、と自分を律して視線を真っ直ぐに戻し、厳かに一礼をする。そこでようやく彼は立ち上がって、他の親類の元へと歩いていった。

しかし、やはりその後ろ姿は、大理石のエントランスで見送る彼のそれとは、少しも重ならないのだった。

「母さま。喪服、ありがとう」

割烹着を纏って台所に立つ母さまに、僕はふいに話しかけた。

「まあ、いいのよ、それくらい。でも、和服でなくて本当によかったの？　あまり着る機会もないでしょうに」

「わたしは母さまほど似合わないもの。せっかくのお着物がもったいないわ」

「あら、そんなことはないと思うけれど。今日もいろんなひとからお褒めいただいたもの。うつくしいお嬢さまですねって」

ああ、母さまはこういうひとだった、と僕は思う。何の嫌らしさもなくそう言い放ってしまえる謙虚さ。どんな人間とも当たり障りなくやり過ごせてしまう物腰の柔らかさ。実際に、僕が高校を卒業して家を出るまで、一度も険悪な雰囲気になったことはなかった。――母さまの息子を殺したのは、まぎれもない僕だというのに。

「……あら？　レースがついたたままだけど、外していかないの？」

母さまは、僕の後ろ髪にくくりつけられた黒いレースの飾りに手を這わせた。

「ああ、自分で外そうと思ったんだけど取れなくて」

「こちらへいらっしゃい。直すわ」

僕は言われるままに、向かいの畳の間にある鏡台の前に座った。母さまの手が、肩の線で切りそろえてある髪を撫でるのを、鏡に映る自分の顔に意識を集中させながらじっと堪える。

「きれいな巻き髪。もう一度のぼしてみる気はないのかしら」

「ないわ。仕事柄、この方がセットが楽でいいのよ」

本当のところはもうひとつ理由があったが、母さまの前では黙っていることにした。

「あらあら、本当にほどけないわね。五センチくらい、切っても構わないかしら」

「ええ。どうせ、美容師さんからただでもらったものだったから」

そう言うと、母さまは隣の箆笥から鋏を取り出してレースのリボンを切った。静かに引き抜かれる感触がして、まとめていた髪がぱさりと落ちる。

「はい。これくらいの長さだったら、まだ使えると思うわ。あとは自分で調節してちょうだい」

「ありがとう」

僕は軽く頷いて、黒いレースと鋏を母さまから受け取った。

「さあ、お茶を淹れるわね。もう少しここで過ごしていくんでしょ？」

「ええ」

そう言うと、母さまは嬉しそうに台所に戻っていった。僕はしばらく呆然としていたが、母さまの後ろ姿と手元の錆びかけた鉄の鋏を交互に眺めているうちにふと思立ち、レースのリボンといっしょに鋏をハンドバッグの中に滑り込ませた。

□

今日も、夜がやって来た。外は先日と打って変わった梅雨らしい激しい雨で、アパートの古い屋根を叩き、壁を流れ落ちる音が部屋を包む。僕はいつものように大すきなタイル張りの浴室でシャワーを帯び、からだの線にぴたりと馴染むシルクのドレスを纏っていた。香水も一番のお気に入り、シャネルのココ。今日も、すべてが順調。すべてが完璧。そのはずだった。

ただひとつだけ、中途半端な長さになった黒いレースのリボンをうまく髪に結べずに、鋏といっしょに手に握ったまま、僕は呆然としていた。空っぽの金魚鉢には、代わりに芍薬の花がいっぱい詰められていた。部屋に帰ってくるたびに、新しい花を一輪手折っては放り込んでいるので、下にいくほど枯れていき、底の方はほとんど腐りかけている。

下の階には彼がいる。僕はそれを知っている。だから僕は一番新しい芍薬の花に鉄の鋏を突き刺し、そして引き抜いてから、彼がたくさんの金魚たちとともに暮らす部屋へと向かう。

部屋の扉は開いている、夜ならいつでも。そして彼も僕がこうして来ることを知っていて、いつものように浴室の中に籠っている。僕はそれに応えて、そっと磨りガラスのドアの前に座り込む。

「僕ね、お兄ちゃんがいたんだ」

黒いレースのリボンをくるくると手に巻きつけながら、僕は誰に向けるともなく話し出す。

「血は繋がっていないけど、仲が良かった。友だちみたいな関係だった」

彼はいつも以上に声を潜めているのか、雨の音だけがやたらと耳に響く。

「でも、それは永遠にというわけにはいかなかった。お兄ちゃんだけが永遠の小学六年生になって、僕だけが成長した」

リボンは強く手に食い込んで、いつか万華鏡で見た模様が僕の肌の上に現れる。

「お兄ちゃんだけじゃない。僕に触れようとした男たちはみんな黙っていつてしまう。僕の体質のせいだなんて知ることもないまま、みんな水に溺れて死んでいつてしまった……だけど」

僕は静かに立ち上がって、磨りガラスに頬ずりする。その向こうで、彼が吐息に出した煙が、水滴になってぽたりと落ちた。

「あなたは」ぽたり。「永遠に」ぽたり。「僕の友だちだよ」

ぽたり。

僕は扉を開け放ち、タイルの床に踏み込んだ。いままで紫煙のスパイスとして紛れていただけの香りが津波のように押し寄せ、僕の感覚を瞬く間に痺れさせる。「やめろ」と彼が叫ぶのにも構わずに、僕はシャワーの栓をすばやく回した。水を全身に浴びたところで突き飛ばされて床に倒れ込んだけれど、僕は臆せず鉄の鋏を逆手に構えながら立ち上がる。そうして初めて、煙と雨の中に座り込む彼は僕の目を真っ直ぐに見上げた。その視線に全身が粟立つのを感じながら、僕は髪をつたって水が流れていくドレスの肩紐を、ひとつずつ鋏で切り落とした。

アパートの近くの用水は、きっと氾濫しているだろう。タイルの上にドレスと鋏が落ちる。僕の肌を内側から引き裂いて放つ声にならない叫びは、轟音とともに大きな流れの中に消えた。

五月雨宮

<http://p.booklog.jp/book/57634>

著者：草谷 十織

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/torilune/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57634>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57634>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ